

G-4 家庭科教育目標の明確化について(オノ報) —表現法の日米比較—

福井大教育 ○木村温美 福井県立敦賀高校 田辺幸子

目的 現在の家庭科における教育目標は、「～について理解させる」「～の能力と態度を養う」というような表現がされていて、生徒がどのような力をどの程度習得したらよいのか甚だ不明確である。そのため評価は個々の内容についてしか行なわれず、目標は単なる作文に終り浮きあがっているのではあるまいか。われわれはこのような疑問から目標の明確化の必要を感じ、主として Bloom 等の「教育目標の分類学」における視点を依り、家庭科教育目標の検討を行い、目標自体とその表現法の改善を目的とする。今回は目標の種類、段階を示す用語につき日米の比較を行うなかで明確な表現法を探索した。

方法 教育目標の分類に関しては Bloom 編著書およびミネソタ州教育局資料により認知的領域、情意的領域、運動技能的領域の三分類とし、比較検討の対象としては日米の指導要領、指導書および関連刊行物を用いた文献精査の方法である。

結果 ①アメリカの場合は生徒の行動を示す用語が用いられ、目標を具体的に、且つ細かく段階を示しているもので、わが国のような多様な解釈をゆるさない。

②目標と手段との対応関係が、アメリカのほうが明確である。

③わが国の場合は目標はきわめて抽象的でありながら、学習経験を示す「内容」は詳細かつ具体的に到達度を示しているもので、目標と内容とをワンセットにはじめて目標行動がわかると同時に、手段の目標化をもたらすおそれがある。